

Long, long ago, ...



今回は400回の記念号(?)ですが、正確な記憶もあやふやな老人性の昔話にしました。

1) あれから40年。

綾小路きみまろの漫談ではないですが、今を去ること41年前の1980年4月に私は長年住み慣れた石川県金沢市から富山県富山市へ移り住み、半年前に開院したばかりの富山医科薬科大学附属病院薬剤部(現、富山大学)に就職しました。開院当初は薬剤部長(教授兼務)、副薬剤部長(実務担当)の他に7名の薬剤師がおり、さらに病院薬剤部は研究室の側面もあったので研究担当副薬剤部長の助教授1名がいました。私は開院半年後に入職した5人の一人でしたが、それまでは副薬剤部長を含めた8名の薬剤師で日直と当直をこなしていたので、私達は彼らの日当直負担を軽減するためにも期待?された新人だったようです。入職してから2カ月で日当直をさせられたほど促成栽培的に仕込まれた記憶があります。

1980年4月当初は総勢15名(男性13名、女性2名)の薬剤部でしたが部長と2人の副部長はともかく、他の薬剤師は私より数年上(それでも6年以内)の先輩が4名のみで私と±1歳違いという20歳代半ばの薬剤師が8名(男性が7名、女性が1名)でしたので、縦長社会というより横一線の仲間意識の強い若い集団でした。そして、それが開院間もない大学附属病院薬剤部の創成期を作り上げるエネルギーになっていたと思います。初代薬剤部長の前職は富山大学薬学部の製剤学系の教授でした。初代副薬剤部長は関東の病院で活動していた薬剤師で開院数年前から富山市内の高校に設置された準備室で開院に備え薬剤部の設計に奮闘されていました。開院当初のメンバーは若いながらも実務にたけた人材が揃えられ、私が入職した時、1歳上もしくは同年の人でも何故にこんなに薬に詳しい!漢方に詳しい!とうならせられる人達ばかりでした。当時の薬剤部長には「大学病院の薬剤師は実務、教育、研究の3つができて当たり前、かつ優れていなければならない」という理念がありましたので、開院後半年経って雇用された私達5人全員が修士課程修了者でした(当時、修士出の病院薬剤師は珍しい存在でした)。

薬剤部で研究実績を上げて薬剤部にいる薬剤師を全員薬学博士にして医師と対等に話しあえる存在にしようというのが当時の薬剤部長の構想だったのです。そのような背景があったせいか私の同期入職者は薬物動態学系の修士卒が1名、製剤学系の修士卒が2名、薬理学系修士卒で製薬企業の研究所にいた少し年上の方が1名と薬と関係のある研究をしてきた人たちばかりでした。私は分子生物学系の研究室で薬とは一切関係の無い生活を送ってきた割には現場の医療に入りたいという思いだけで参加した形になりました。その後、実務面では漢方生薬系修士卒の男性と研究面では後に二代目薬剤部長になる免疫学系博士課程を終えた男性が助手として加わり薬剤部の創成期のメンバーが揃いました。

詳細は忘れてしまいましたが、それから数年も経たないうちにメンバーの何人かが入れ替わり横一線状態の職場関係から緩やかに年齢差がでてくる縦長社会の職場へと移行していきました。

2) 実務、教育、研究、そして医薬分業へ。

現実の出来事は三次元の世界で起こり、それに時間経過が加わり、記憶に奥深さをだしていくのですが、年を取るにしたがい時間軸も含めて二次元化して記憶が平面化してしまう傾向があるようです。数十年前の記憶が、その前後の記憶と一体化してしまい、かつその間の経緯が消滅しているような記憶になってしまっています。これからの話は時間の前後関係が極めてあやしくなっています。

病院での実務は当然毎日の調剤業務が基本路線になりますが、さらに注射薬の払出し、院内製剤、D I 業務、血中濃度測定(私は担当せず)、病棟業務のほか、研究活動、薬学生と医学生の調剤実習担当、薬剤部長担当の薬学生や医学生への講義分担、薬剤部内の自主学習会担当などを通じて教育への比重も多くなり、また私が密かに仕事磁石人間と呼んでいた二代目副薬剤部長の指導のもとで 30 歳代は富山県病院薬剤師会のいくつかの小委員会の委員長として県内病院薬剤師の皆さんに向けた研修活動やD I 活動などを経験してきました。それらの体験が私を三つの方針の中の教育という分野へ進ませようとしていた感覚があります。従って研究への情熱は薄い方だったと言えます。病院が開院して数年経過後も中々、薬剤部内で薬学博士(論文博士)は生まれませんでした。いつしか博士課程を終えた人達が薬剤部の実務部門に入ってくるようになりました。薬剤部の研究実績をあげる目的と修士出職員の博士化促進を狙った方針だったようです。彼らはもとより研究がしたい人達でしたから多くの人は実務に身が入るわけではなく結局大学や製薬会社の研究施設へと巣立っていきました。それでも彼らの中の一人が私の研究をバックアップしてくれて 40 歳を前にして薬学論文博士を取得できました。

当時、薬剤部と関係の深かった和漢診療病棟では薬剤師が病棟業務を実施していましたが、他病棟では実施していなかったため私の博士号取得後の最初の仕事は第三内科病棟(当時は肝疾患、消化器疾患、白血病の専門病棟)への薬剤師業務拡大とナースと共同の混注業務体制づくりでした。やがて初代薬剤部長の定年退官が近づき、初期薬剤部メンバーの存在は二代目薬剤部長のためにはならないという方針のもとで、私と同期周辺の連中は県内外の病院薬剤部長や大学研究室などへ移っていきました。残されたのは二代目副薬剤部長と私の二人だけになりました。その当時(1990 年代初頭)は全国的に医薬分業が政策誘導的に推進され始めた頃で富山県も医薬分業を推進する方向で動き始めました。富山県内では県立中央病院が最初に院外処方箋を発行しました。当時の富山県薬剤師会は門前薬局の存在を徹底的に排除するために自ら会営薬局を県立中央病院の門前に開設して近くにできた他の門前薬局の動向を逐一監視したり、県薬剤師会会長が薬局は株式会社であるべきではないと発言したりと私には全く理解できない活動を展開していました。富山県は自民党王国と呼ばれるくらいに保守性の強い県ですから政権が推進する医薬分業にすんなり移行すると思われましたが医療機関の反発が強かったのか県薬剤師会への信頼が無かったのか院外処方箋発行率は常に全国ワースト 3(10%未満で、他は石川県と福井県といわゆる北陸 3 県)に入っていました。そのような中で 1993 年に大学病院も県内で 2 番目に院外処方箋の発行に踏み切りました。私も外来窓口に出て院外処方箋発行業務も担当しましたが院外処方率がかかなり低かったので「何故、私は院内で薬をもらえないのか」と喰ってかかる患者さんへの苦情対応係のような印象がありました。その後、大学病院を出ていくなら病院ではなく保険薬局が自分の職能を活かせる場所かもしれないと思い、大学病院近くの 2 軒目の調剤薬局へと移りました。そこで 3 年間過ごしましたが院外処方箋発行率の伸びが無いゆえの経営的な葛藤と精神的な重圧が発生したのと当時の県薬剤師会の商売人気質への嫌悪感などもあり、調剤薬局から民間病院へ移りアルバイトの病院薬剤師として出直しを始めました。そこで貴重な患者さん対応を学ばされた 5 年後、富山県も医薬分業が活発になり始め、その病院でも院外処方箋発行が決断され、その門前薬局開設時に再び薬局薬剤師となり 3 年間仕事をしました。富山県では大学病院が処方箋発行をしてから医薬分業が相当程度進むまで実に十年もの歳月が必要だったのだと実感しました。話は変わりますが、私は移った職場の先々で若手薬剤師を集めては勉強会を開催して意見交換をしていました。その背景には大学病院時代の「実務、教育、研究」の中で教育への私の志向性が出ていたのだと思います。そのあげく、これまでの職場の理解も得えながら薬局運営アドバイザーとして特に薬剤師の自己学習のバックアップ業務をしようと独立しました。しかし独立して間もなく、ある病に倒れてしまい、これまで関わってきた職場を対象にした細々とした活動しかできなくなり、さらに年齢的問題も加わり徐々に縮小しながら今に至っています。(終わり)